

手づくり音楽祭も8年目（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2012/3/20 7:00 | 日本経済新聞 電子版

生来、へそ曲がりなのか、無頓着というか、能天気なのか、なにかをやろうとして、人に理解されないことが、あまり気にならない。インターネットにしても、事業を始めた20年前は、一部の専門家だけの世界で、普通の人々が、「インターネット」という言葉を知る由もなかったけれど、いずれ電話に代わる技術だと、大まじめに吹聴をして事業化を始めたのだが、不備があったり、役所の許可が下りなかったり、食うや食わずになってしまう程、追い込まれて、ずいぶんと辛くて厳しい時期を過ごした。

誰も知らない、あるいは理解ができないことをしようとして、いちばん困るのは、なにより先立つお金が集まらないことである。なにをやるにも、ある程度は資本が要るわけで、理解されないことを始めるのは、そのぶん余計な苦労をしなくてははいけない。難事をどうやって乗り越えるかという、私の場合、やり始めたら、「やるっきゃない」というか、意固地になって頑張るのである。もともと「頑張ろう」といった言葉が嫌いで、普段から、よく言えば、おおらかというか、抜けが多く、なにごとにもこだわるできない性格なのだが、たまに意固地になると、人の理解はともかく、最後まで粘り抜くものだから、ずいぶんと相矛盾した性格なのである。

梅の香がきえて、沈丁花が早春のにおいを漂わせ、桜のつぼみが膨らみ始めるころになると、眠る時間もなくなるほど、忙しい日々が始まる。桜のつぼみが膨らみ始めて、桜吹雪となって舞うまで、ほぼ、ひと月ほどは、年度決算等々で、仕事が重なる合間を縫っては、主宰する「東京・春・音楽祭」にかかりきりになる。今年は、長く冷たい冬が続いて、3月も半ばを過ぎても、桜のつぼみは膨らむ気配もないのだが、16日から音楽祭が始まっている。

高校時代、学校に行きたくなくて、登校時、裏門からそのまま正門に抜けて、カバンをぶら下げては上野の博物館等々で時間をつぶしていたせいか、上野に来るたびに、昔々の古い記憶がよみがえるのだが、その上野で音楽祭を始めて8年になる。いうまでもなく、上野の山は、江戸時代から花見でにぎわった地であり、維新後は、財政難にもかかわらず、世界に比するような文化施設をつくらうという明治政府を担った若い革命家の志に始まって、以来、震災や戦争をはさみ、100年を超える時間をかけて営々と築いた文化ゾーンである。国立博物館に始まり、芸術教育の施設、美術館、科学博物館、昭和36年には日本を代表するコンサートホールである東京文化会館の竣工に至るまで、まさに、世界的にもまれな文化ゾーンとなっている。その上野で、当初は小澤征爾さんと「世界に発信しよう」という新演出のオペラ公演に始まり、8年目を迎えた今年は、100を超すさまざまなコンサートを催す音楽祭になってきた。国立博物館をはじめ、さまざまな文化施設を利用させていただき、桜の季節、上野を桜と音楽の饗宴の場にしようという試みが、8年目にして、なんとか形になってきたのである。音楽について言えば、上野は明治以来、西洋音楽を受容してきた歴史そのものの地である。

音楽業界に一切のかかわりがなく、単なる一音楽ファンで、小澤さんの友人でしかなかった私が始めたこの音楽祭は、当初、関係者からも上野の方々からも奇異な目で見られていたようだが、フェスティバルというのは、続けることに意味があると、音楽祭で指揮を振っていただいたムーティさんをはじめ、海外の著名な音楽家に励まされて、なんとか続けているうちに8年目となったのである。現在では世界の人を集めるほどの音楽祭でも、当初は、聴衆よりも演奏者の方が多かったという例もよくあると、そんな話で励まされたのだ。資金という面では、勝手に始めたこともあり、公的な援助とは無縁に続けてきたわけで、結構、苦勞をしてきたのだが、「鈴木さん、破産するんじゃない」と心配してくれた友人諸氏、企業の方々の応援や支援が徐々に増えて、たったひとりの思い込みのフェスティバルから、大きな輪ができつつある。東京の不思議な音楽祭として、ようやくひとつのステップから次の発展を迎えるようになってきた。むかしからある夏祭りのように、神社の境内に酒一升といった奉納が記されるように、この音楽祭にも応援団が、たくさん集まってくれるのが夢だったのだが、それが少しずつ形になり始めてきたことが、とてもうれしいのである。

去年は、音楽祭の直前、東日本の大震災があって、なにごとにも自粛といった空気だったのだが、このような悲しみを癒やすことができるのは音楽であり、音楽の力を信じるなら、音楽祭を開催しようと演奏家に呼びかけたら、多くの演奏家の共感を得



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。



て、余震に揺れるなか、計画の半分ほどではあったけれど、コンサートができて、ささやかながら、人びとに安らぎと喜びを分け合うことができた気がする。とくに、音楽祭のフィナーレにあたる4月8日に、震災から間もない時期なのに、急きよ来日をしていただいたズービン・メータさんの指揮によるベートーベンの第9交響曲では、演奏家と聴衆が一体となって涙を流すという類まれな演奏会となって、生涯、記憶から消えない夜となった。メディアの悲惨で痛ましい被災の状況を流し続けることだけでは、生きることの再生や救いはないという思いがあったのである。誤解を招く言い方だが、被災者の悲しみや痛みを、遠くにあった人間が、どこまで奥深く分かち合えるのかという疑問もある。テレビのタレントさんが発する、もっともらしく大げさな哀悼の言葉を聞くほどに、犠牲者の悲しみの深さが汚されるように感じてしまうのである。

夢を見た 登校始めの日なのに わたしは遅刻したのだった

室内のすべての顔が白い仮面をつけていた

誰が私の先生か かいもくわからなかった

(「悲しみのゴンドラ 8」T.トランストロム)

世界の報道に触れると、いまだに悲惨としか言いようのない紛争が日々報道されている。市街地への無差別攻撃が続くシリアの状況を見る。アサド政権による無差別攻撃の弾圧によって、市民の死者は8000人とも1万人ともいわれている。周辺諸国の軍事介入の要請に対して、アメリカもヨーロッパも慎重である。ソ連、中国は内政干渉だと取り合わない。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ戦争の折は、50万人を越す死者が出て、軍事介入がなされた。死者の数で軍事介入が決まるわけでもないとは思いますが、遠いシリアの国の状況を見るたびに、黙って被災者の画面や、攻撃を行っているアサド氏の言葉を眺めるほかなくなってしまふ。ヒトラー、スターリン、毛沢東等の時代、20世紀の虐殺の単位はけた違いで、それに比べると、わずかな数かもしれないが、ひとりひとりの命は命である。といって、個人が、遠い国からその事態を眺めていても、なにもできることはないわけで、事態の推移を傍観するだけである。グローバル化が進んでも、国家が他の国に「人権」という旗印によって軍事介入すること程、難しいことはない。

図書館にこもるか、街を放浪して、学校にも行かず、時間をつぶしていた10代の終わりに読んだ、シリアについて書かれた叙述がおぼろげなまま記憶に残っている。イスラム教が生まれる以前から、ネストリア派キリスト教徒であるシリアの人が医者としてアラビアの各地で活躍していて、マホメットも宗教的な教養についてはシリア人から大きな影響を受けているという。シリアやペルシャがイスラム教徒に征服されてからは、アラビア世界におけるシリア人の学問への貢献は大きかった。アリストテレスをはじめとするギリシャ思想の東方移植については、そのほとんどは、シリア人によって翻訳された。ギリシャ語からシリア語へ、そしてアラビア語に翻訳をされることによって、ギリシャ哲学を継承したアラビア思想の根幹がつくられていったのだと。それはヨーロッパのキリスト教のスコラ哲学に移入されて、西洋の哲学に大きな影響を与えたのだが、そのはじめはシリアの修道僧であり医者であった人々によるものである。千年以上も前の歴史を思い出して、なんの意味があるのかと言われれば、答えようもなく、ただ、記憶の底にある知識が浮かんでしまうだけのことなのだろう。千年も前のシリアについての記憶が消えないのに、遠い国にしても、その後の千年のシリアの歴史についての知識はほとんどないのだから。国の歴史というのは、不思議なものである。昨年の大震災にしても、長い歴史という時間軸のなかで、いずれ風化してしまうに違いない。ただ、その天災の規模や犠牲者の数だけが無機質な記録として残るに違いない。そんなものであるとしか言いようがない。

音楽祭の話に戻ると、ここ2、3年、従来といちばん変わってきているのは、平日のマチネーというか、平日の昼間のコンサートに、たくさんのお客さんが来てくれるようになったことである。ニューヨーク・フィルに金曜日のマチネー・コンサートがあって、いつも満員なのだが、演奏会場を見渡すと、真っ白、つまりほとんどの聴衆の髪が白い、聴衆のほとんどが、高齢者なのである。聴衆の平均年齢は65歳を超えている。高齢化の先頭を走る日本も、昼間の時間を自由に使える元気な高齢者が増えて、音楽会にたくさんの方が足を運んでくれるようになったのである。ワーカホリックという言葉が、まさに日本のビジネスマンを表現していた働き蜂の世代が、リタイアし、奥様と平日の昼の演奏会を楽しんでいただけるほど、うれしいことはない。さて、財政破綻の危機をはらみながら、高齢化社会の負担について明確な指針を出せずにいる政府、一方、それなりの豊かさで、リタイアメント後の人生をささやかながら楽しめるようになった高齢化社会の先行きをどうしていくのかは、まさに政治家の役割である。

読者からのコメント

小倉撃門さん、60歳代男性

先ずは鈴木さんの言葉を額面通りに鵜呑みにすることと其れらを今の流行り言葉に擬することをお詫びして、コメント申し上げます（笑）。「無頓着」や「能天気」は兎も角として、「へそ曲がり」とか「人に理解されないことがあまり気にならない」という性向や先端ビジネスにも世界の歴史にも音楽にも並外れて精通される鈴木さんは、S.ジョブズさんが2005年米スタンフォード大学の卒業式で"Stay Hungry. Stay Foolish"や"Connect the Dots"と世界に公言する遥か前から実践されていたのだと感服致します。

城後さん、30歳代男性

東京文化会館の門前で写真を撮られている鈴木社長を拝見しました。素敵なお笑顔でした。だからこそ、8年間つづけられているのだなあと感慨深くなりました。今年はオペラに参加させていただきたいと思っています。始まって以来読ませていただいている、まさにこのブログの影響ですが…。

鈴木幸一 IIJ社長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

[経営者ブログ トップ](#)

[ビジネスリーダー トップに戻る](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。